

## 九州支所

九州支所研究調整官 鶴 助治

九州支所がカバーする九州地域はわが国全体の1割程度の面積ですが、地理的には北は長崎県対馬島の北緯35度から南は沖縄県波照間島の北緯24度まで広がっています。このため九州地域は本土を中心とした暖温帯域と、台湾方面に向かって細長く連なる南西諸島の亜熱帯域にまたがり、多様な自然植生が分布しています。

また、九州本土では人工林率が55%に達し、きのこや木材の生産による山村の経済振興が期待されているとともに、国民の森林に対する期待は、水資源のかん養や国土保全、野生生物の管理と保全、地球温暖化防止等、木材生産機能以外にも大きな高まりを見えています。

以上のような九州地域の特徴を背景に、九州支所では3人のチーム長と五つの研究グループの下に森林の様々な機能を持続的に発揮させるための研究を行っています。

南西諸島担当チーム長は南西諸島の森林に生息する生物の実態を調べ、環境変化や外からの侵入生物がそれらに及ぼす影響を評価する研究を行っています。稀少鳥類の一種アカヒゲの生息実態、稀少野生きのこの分布や生息、南根腐病について研究を行っています。

生物被害担当チーム長は、人工林や天然林に様々な被害を及ぼす生物の生態を明らかにし、森林の健全性を向上させるための研究をしています。また、被害の発生メカニズムを明らかにして、予察から防除にいたる総合的な管理技術の開発を行っています。

育成林担当チーム長は、霧島山系などに設定された森林生物遺伝資源保存林周辺の放置された針葉樹人工林や二次林が資源の保全や生物多様性保全の機能を維持・向上させるための研究を行っています。

森林生態系研究グループでは、暖温帯森林の更新機構解明と保全技術の向上、環境変化に伴う森林生態系への影響解明、立地特性及び土壌の諸機能の解明に関する研究を行っています。

山地防災研究グループでは、森林の水保全機能を解明するために森林流域に量水施設や観測タワーに計測機器を設置し、森林流域の水文・気象現象を調査しています。また、森林の土保全機能については、火山地域を中心に各種災害の実態及び発生メカニズムの解明を進めています。

森林微生物管理研究グループでは、九州・沖縄地域で問題になっている「ナラ・カシ類枝枯細菌病」、 「マツ材線虫病」などの病害についての研究、並びに野生きのこの利用や分類学的研究、栽培きのこの遺伝育種及び害菌問題についての研究を行っています。

森林動物研究グループでは、スギ、ヒノキ、マツなどの針葉樹や各種広葉樹の害虫獣の生態を明らかにすることによって、森林に対する生物被害の回避・防除技術を確立するための研究を行っています。また、生物多様性の指標の開発、稀少・固有動植物の保全技術の開発にも取り組んでいます。

森林資源管理研究グループでは、森林資源にかかわる様々な情報と地理情報システム（GIS）などの情報処理技術を用いて、林業が成立するための地域的条件や効率的な管理技術に関する研究を行っています。